# 明石の史跡（６５）松江の勧進如法経

貞治３年（１３６４）、福祥寺（須磨寺）住持の賢祐は、勧進如法経の実施を決断する。まず須磨村の薬師堂（浄福寺＝頼政薬師）を皮切りに、ついで播州松江（明石市松江）でおこなう。

４年前の延文５年（１３６０）３月２７日、福祥寺は炎上。金堂、釈迦堂、鐘楼などの建物や、法会具足などを焼失する。多数の僧侶が離散という非常事態に直面した（「当山歴代」『兵庫県史史料編中世１』６７～６８頁）。

寺院再興の手段として、如法経の勧進がおこなわれた。「如法経」（にょほうぎょう）とは、「一定の規則にしたがって経文を書写すること。特に『法華経』を写すこと」をいう（中村　元著『仏教語大辞典下』１０６３頁）。しかも勧進である以上、人と物が流通する場所である港が対象となるのは、不思議なことではない。

さかのぼること１００年以上も前の、建長８年（１２５６）４月７日、かねてから申請のあった、播磨国多聞寺（神戸市垂水区多聞台）の明石津における勧進行為を、１０年間に限って認める旨の、朝議決定がなされた（『経俊卿記』）。福祥寺は、なぜ明石津ではなく、松江であったのか。

松江（正護）寺の東６００メートルの地域にある、林崎三本松瓦窯跡群は、１２世紀末以来、京都の著名寺院の瓦を生産・供給しており（『発掘された明石の歴史展』９～１２頁）、福祥寺が意図したのは、金銭もさることながら、復興資材の調達も、重要な要素として忘れることはできない。

今日、淡路島を眼前に、風光明媚でかつ閑静な松江地区ではあるけれども、中世のある時期においては、人々のざわめきが飛び交い、活気に満ちた港町であった松江。時の流れのすごさを感じるのは、筆者のみだろうか。

日本歴史学会会員　茨木　一成

林崎三本松